

【原 著】

コロナ禍における 2020 年度の学級生活満足感と意欲の検討
—小学校低学年の児童に注目して—

武蔵 由佳* 河村 明和** 河村 茂雄***

2020 年度, 新型コロナウイルスの感染予防のため, 他者との直接的なかかわりや協働活動の展開が制限された状況で学校教育は展開された。本研究では, そのような状況が, 小学校低学年の児童にどのような影響を及ぼしたのかを, 探索的に明らかにすることを目的とした。そこで, 同じ地域の同じ学校の低学年の児童を対象にして, 新型コロナウイルス問題発生以前の 2019 年度と感染症対策が徹底された 2020 年度に, 児童の学級生活満足感と意欲 (スクール・モラル) を調査し, 年度ごとの差を検討した。その結果, 全体的に, 被侵害得点が 2019 年度よりも 2020 年度の方が低く, 非承認群の出現率の増加と学級生活不満足群の出現率の減少が認められた。他者とのかかわりが制限されたため被侵害行為が減少したことで, 2 年生と 3 年生では, 学級生活不満足群から非承認群への移行がなされているのではないかと考えられた。特に学年別では, 1 年生においては 2020 年度に承認感, 友達関係, 学級の雰囲気有意に低かった。1 年生には「小 1 プロブレム」の問題が指摘されてより手厚い支援が期待されている中で, コロナ禍で個別対応などが制限された可能性が推測された。

キーワード: 新型コロナウイルス感染症, 協働活動, 低学年, 学級適応, 学校生活意欲

【問題と目的】

2020 年度, 「主体的・対話的で深い学び」による授業改善を謳った新学習指導要領が, 小学校において全面実施された。知識や情報が ICT 機器を通して急速に更新されていく時代となった。それに応じて, 従来の「知識の習得を重視した教育」から, 既存の知識を活用したり新たな知識を創り出したりすることを, 他者と協働してできる, 問題解決型学力である資質・能力の育成を目指す教育への改革が行われた。「主体的・対話的で深い学び」による授業改善に対する意識は, 2017 年 (平成 29 年) 版学習指導要領 (中央教育審議会, 2016) が発表されてから学校現場では高まっていた。しかし, 新型コロナウイルス感染症の世界的流行 (パンデミック) が日本にも 2020 年 2 月頃

に発生し, その感染が全国に広がった。感染拡大を防ぐために, 全国すべての小中高校と特別支援学校の一斉の休校措置が 2020 年 3 月初旬から始まり, 休校措置は首都圏では 5 月末までの約 3 か月間にも及んだ。この時期は, 新たなクラス, 新たな担任での新学年スタートの時期であり, その教育期間が減少してしまったのである。このような状況の中で, 新学習指導要領のスタートもある程度の混乱に陥ったと考えられる。

学校再開後も文部科学省による感染対策のマニュアル (2020) 等の基本的な感染症対策の徹底を前提にして学校教育活動は実施された。例えば, 児童たちはマスクの着用を徹底して学校生活を送ることになった。学校では密閉・密集・密接の 3 つの密を避けるように, 教室の座席は大きく離された。学級の規模に応じ, 児童たちを 2 つのグループに分け, 異なる時間で指導が行われた。児童たちが密集する運動や近距離で組み合わせたり接触したりする運動は中止された。担任教師もマスクの着用が徹底され, 教室の換気の徹底や至るところの消毒, 児童たちが 3 密にならないようにと

* 都留文科大学

** 東京福祉大学

*** 早稲田大学教育・総合科学学術院

いう「感染防止対策」の指導と対応が前提となって、学習指導や生活指導が行われたのである。つまり、新学習指導要領で推奨されている協働学習の能動的な展開どころか、日本の学校教育の特徴である、集団活動を通じた人格形成の取り組みに関して、物理的なかわりが制限され、集団活動を通じた体験学習をすることが不十分になってしまう可能性が高まったのである。

小学校低学年は、学校教育を通して集中的思考の学習の基礎が形成される段階で、個々の児童の特性に応じた適切な支援が期待される時期である。集中的思考とは多くの条件の中から一つの答え・アイデアを導き出す思考である。幼児期までは拡散的思考が主であり、「ごっこ遊び」に代表されるように一つの条件をもとにいろいろなイメージを広げる思考をするものである(河村, 2010)。その学習活動の変化に対する支援に難しさがあり、近年様々な問題が生起している。例えば、「小1プロブレム」の問題である。小学校1年生の児童が、遊び中心の幼児教育から一斉授業中心の小学校教育へ指導が一変することに適応できず、教師の話を受けない、指示に従わない、授業中、勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外へ出て行ったりするなどの行動が起り、クラス全体の授業の展開に支障が出ているのである(文部科学省, 2009)。東京ではこのような不適応状況を経験した校長が23.9%、教諭が19.3%いることが指摘されている。そして、このような状況の終了時期は「年度末まで継続」が過半数にのぼり、長引く小1プロブレムの深刻さが問題提起されている(東京都教育庁, 2009)。さらに、文部科学省(2017)によると2016年度のいじめ認知件数は、小学1年生～高校3年生までの中で小学2年生が4万5,868件で最多で、次いで小学3年生、小学1年生といずれも小学校の低学年に多いことが報告された。また、「暴力行為」の発生件数では、中学・高校ではここ数年減少しているのに対し、小学校の低学年での増加が著しく、小学2年生では2006年度の238件から2016年度で2,584件と、10倍以上になっていることが指摘されている。つまり、現在の低学年の児童たちは、より手厚い支援が必要な状態になっていると考えられるのである。

2020年度、小学校から全面实施された新学習指導要領の、協働活動の視点が適切に実施されたならば、手厚い支援が必要な低学年の児童にも有効に作用すると考えられる。そこで本研究では、関東圏のA市の小学校を対象にして、コロナ禍前後の2019年度と2020年度の低学年、1～3年生の児童を対象にして、児童の学級生活満足感と意欲(スクール・モラル)を比較分析し、他者との直接的なかわりや協働活動の展開が物理的に難しくなった2020年度の学校教育の影響を検討することを目的とした。

【方法】

1 調査時期

2019年9～11月および2020年9～11月に実施した。

2 調査対象

A市の公立小学校6校の児童1～3年生を対象とした。2019年度は、1,764名(男子893名、女子871名)を対象とした。内訳は、1年生607名(男子315名、女子292名)、2年生615名(男子308名、女子307名)、3年生542名(男子270名、女子272名)であった。2020年度は1,876名(男子949名、女子927名)を対象とした。内訳は、1年生641名(男子320名、女子321名)、2年生615名(男子318名、女子297名)、3年生620名(男子311名、女子309名)であり、有効回答は、2019年度は、1,757名(男子888名、女子869名)であった(有効回答率99.60%)。2020年度は1,867名(男子944名、女子923名)であった(有効回答率99.52%)。

3 測定用具

児童の学級や学校場面における満足度や意欲(スクール・モラル)を測定するための標準化された尺度であるhyper-QU小学校1～3年用(河村, 2006)より下記の尺度を用いて調査した。

(1) 学級満足度尺度

承認感と被侵害感の計12項目(各6項目)から構成されている。評定は「1:まったくそう思わない」から「4:とてもそう思う」までの4件法で、単純加

算により得点を算出する。下位尺度の全国平均値を基準に、「承認感」と「被侵害・不適応感」の各得点の交点によって、学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群の4つの群に分類することで、児童の学校適応状態を理解することができる。

(2) 学校生活意欲尺度

児童が学校生活のどの領域で意欲を感じているかを問うものである。友達関係、学習意欲、学級の雰囲気 の計9項目(各3項目)から構成されている。評定は「1:まったくそう思わない」から「4:とても思う」までの4件法で、単純加算により得点を算出する。

4 調査手続き

調査校を管轄するA市の教育委員会と著者所属大学との間で今回の調査の契約を締結し、各学校の全校長に研究目的と調査の内容を説明し、全学校に対して依頼後2ヶ月以内に調査の実施を求めた。調査研究

の内容については、著者所属大学の倫理委員会の審査を受け承認を得ている。調査用紙には本調査が学校の成績に関係がないこと、担任の教師および友達に回答の内容が公開されないことがないことを明示した。さらに担任教師には、実施の手順・注意事項のプリントの通りに実施することを依頼し、児童の回答用紙は渡した封筒に入れ、その場で密封してもらい、児童に余計な不安がかからないよう配慮した。

【結果】

1 全体傾向

(1) 2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度得点の比較

2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度得点の比較をするために、*t*検定を行った

Table 1 2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度得点の比較

	2019年度 (<i>n</i> = 1,757)		2020年度 (<i>n</i> = 1,867)		<i>t</i> 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
承認得点	19.22	3.54	19.04	3.59	1.48 <i>n.s.</i>	
被侵害得点	9.80	3.47	9.26	3.25	4.75***	2020<2019
友達関係	10.35	1.58	10.29	1.62	1.30 <i>n.s.</i>	
学習意欲	10.31	1.55	10.29	1.54	0.37 <i>n.s.</i>	
学級の雰囲気	10.91	1.44	10.98	1.42	1.65 <i>n.s.</i>	

*** : *p*<.001

Table 2 2019年度と2020年度の学級満足度4群の出現率

		年度	
		2019	2020
学級生活満足群	人数	1,113	1,187
	%	30.71	32.75
	Adj.	-0.14 <i>n.s.</i>	0.14 <i>n.s.</i>
非承認群	人数	▼ 272	△ 385
	%	7.50	10.62
	Adj.	-4.01***	4.01***
侵害行為認知群	人数	153	133
	%	4.22	3.70
	Adj.	1.77 <i>n.s.</i>	-1.77 <i>n.s.</i>
学級生活不満足群	人数	△ 219	▼ 162
	%	6.04	4.47
	Adj.	3.71***	-3.71***

*** : *p*<.001 △ : 有意に高い, ▼ : 有意に低い

(Table 1)。結果、低学年においては被侵害得点が2019年度よりも2020年度の方が有意に低かった。

(2) 2019年度と2020年度の学級満足度4群の出現率

学級満足度4群の出現率に違いがみられるのかを検討するために、2019年度、2020年度の出現人数に、 χ^2 検定を行った (Table 2)。結果、低学年において、2020年度の非承認群の出現率の増加と学級生活不満足群の出現率の減少が分布の偏りに影響を与えていることが明らかになった。

2 学年別の傾向

(1) 2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度得点の比較

低学年における学年別の2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度得点の比較をするために、学年(3)×年度(2)の2要因分散分析およびBonferroni法による多重比較を行った (Table 3)。その結果、承認感は学年の主効果が有意で、1年生より、2、3年生の得点が高かった。また、交互作用も有意で、2019年度では、1年生より3年生の承認感が高く、2020年度では、1年生より2、3年生の承認

感が高い結果となった。被侵害感では、年度の主効果が有意で、2020年度より2019年度の被侵害感が高かった。また、学年の主効果も有意で、2、3年生より1年生の被侵害感が高い結果となった。友達関係は、学年の主効果が有意で、1年生より2、3年生が高かった。また、交互作用も有意で、2019年度では、1年生より3年生の友達関係が高く、2020年度では、1年生より2、3年生の友達関係が高く、1年生では、2020年度より2019年度の友達関係が高い結果となった。学習意欲では、学年の主効果が有意で、3年生より1、2年生が高かった。また、交互作用も有意で、2019年度では、1年生、2年生、3年生の順で学習意欲が高く、2020年度では、3年生より1、2年生の学習意欲が高い結果となった。学級の雰囲気では、学年の主効果が有意で、1年生より2年生が高かった。また、交互作用も有意で、2020年度は、1年生より2、3年生の学級の雰囲気が高い結果となった。そして、1年生では、2020年度より2019年度が高く、2年生では、2019年度より2020年度が高い結果となった。

Table 3 学年別の2019年度と2020年度の学級満足度尺度、学校生活意欲尺度の比較

年度 学年	2019			2020			主効果		交互作用
	1年生 (n=604)	2年生 (n=613)	3年生 (n=540)	1年生 (n=637)	2年生 (n=614)	3年生 (n=616)	年度 F値	学年 F値	F値
承認感	18.82 (3.92)	19.32 (3.30)	19.54 (3.32)	18.14 (4.01)	19.68 (3.31)	19.31 (3.27)	2.22 <i>n.s.</i>	29.70***	6.50** 2019年度1年生<3年生 2020年度1年生<2,3年生 1年生は2020年度<2019年度
被侵害感	10.35 (3.63)	9.42 (3.21)	9.61 (3.48)	9.73 (3.57)	9.02 (3.03)	9.02 (3.08)	23.00***	22.36***	0.34 <i>n.s.</i> 2020年度<2019年度 2,3年生<1年生
友達関係	10.15 (1.68)	10.39 (1.51)	10.54 (1.51)	9.87 (1.84)	10.51 (1.48)	10.49 (1.42)	1.79 <i>n.s.</i>	36.39***	5.01** 2019年度1年生<3年生 2020年度1年生<2,3年生 1年生は2020年度<2019年度
学習意欲	10.54 (1.51)	10.30 (1.58)	10.07 (1.53)	10.35 (1.58)	10.49 (1.42)	10.04 (1.56)	.06 <i>n.s.</i>	22.18***	4.64* 2019年度は3年生<2年生<1年生 2020年度は3年生<1,2年生 1年生は2020年度<2019年度 2年生は2019年度<2020年度
学級の雰囲気	10.93 (1.41)	10.89 (1.48)	10.90 (1.44)	10.75 (1.68)	11.17 (1.21)	11.04 (1.28)	2.94†	5.91**	8.27*** 2020年度は1年生<2,3年生 1年生は2020年<2019年 2年生は2019年<2020年

上段：平均値 下段：標準偏差 †: $p<.10$, *: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

Table 4 2019年度と2020年度の学級満足度4群の出現率

		2019年度			2020年度		
		1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
学級生活満足群	人数	▼ 339	407	△ 367	▼ 333	△ 439	△ 415
	%	19.29	23.16	20.89	17.83	23.51	22.23
	Adj.	-4.54***	1.94n.s.	2.67**	-7.30***	4.98***	2.40*
非承認群	人数	△ 110	96	▼ 66	△ 179	▼ 87	119
	%	6.26	5.46	3.76	9.59	4.66	6.37
	Adj.	2.29n.s.	0.15n.s.	-2.52*	5.75***	-4.82***	-0.98n.s.
侵害行為認知群	人数	58	49	46	△ 56	37	40
	%	3.30	2.79	2.62	3.00	1.98	2.14
	Adj.	0.96n.s.	-0.78n.s.	-0.19n.s.	2.01*	-1.29n.s.	-0.74n.s.
学級生活不満足群	人数	△ 97	▼ 61	61	△ 69	51	▼ 42
	%	5.52	3.47	3.47	3.70	2.73	2.25
	Adj.	3.48***	-2.41*	-0.99n.s.	2.38*	-0.40n.s.	-2.00*

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$ △: 有意に高い, ▼: 有意に低い

(2) 学年別の2019年度と2020年度の学級満足度4群の出現率

低学年において、学級満足度4群の出現率に違いがみられるのかを検討するために、学年別の2019年度、2020年度の出現人数に、 χ^2 検定を行った(Table 4)。結果、2019年度においては1年生の学級生活満足群の出現率が低く、非承認群と学級生活不満足群の出現率が高いことが明らかになった。2年生は学級生活不満足群の出現率が低く、3年生は学級生活満足群が多く、非承認群の出現率が低かったことが明らかになった。2020年度においては、1年生の学級生活満足群の出現率が低く、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群の出現率が高い点は、2019年度と同様の傾向が見られた。2年生は学級生活満足群が多く、非承認群が少なかった。3年生は学級生活満足群が多く、学級生活不満足群が少なかった。

【考察】

本研究の目的は、他者との密接なかわりや集団活動を制限する新型コロナウイルスの感染予防を前提に展開された2020年度の学校現場の状況が、学校教育を受ける基盤を確立する時期の小学校低学年の児童にどのような影響を及ぼしたのかを、探索的に明らかにすることであった。この目的を達成するために、同じ

地域の同じ学校の児童を対象にして、新型コロナウイルス問題発生以前の2019年の9～11月と感染症対策が徹底された2020年の9～11月に、児童の学級生活満足感と意欲(スクール・モラル)を調査し、その年度ごとの結果を比較検討した。

その結果、2019年度に比べて2020年度では全体的に被侵害得点が有意に低いことが確認された。同時に、学級生活不満足群の出現率が有意に低くなっている一方で、非承認群の出現率が増えていることが確認された。これは、他者とのかわりが制限されたため、人間関係の軋轢と関連が想定される被侵害行為が減少したことで、学級生活不満足群から非承認群への移行がなされたのではないかと考えられる。

学級生活不満足群の減少自体は、一見、好ましい事のように感じられる。しかし、非承認群の子どもは被侵害感が少ないが、承認感を感じることも少なく、主体的に学校生活を送っている状態とは言えず、教育的課題を孕んでいる。なぜならば、非承認群の子どもは学習や友達関係、学級活動に関する意欲が相対的に低いことが指摘されており(河村, 2006)、二次的援助としての個別支援が必要な子どもだからである。さらに、非承認群の児童が増えているという状況は、他者と協働して問題解決型学力である資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」による授業改善とは逆の方向で、児童同士の相互作用が抑制されてい

る状態であると考えられる。低学年は学校教育を通して学習活動の基礎が形成される時期であるが、人とかわからないことで嫌なことが少なくなったという体験は、協働活動・学習に能動的に参加する意欲を低下させる可能性も危惧されるのである。

その危惧が、2020年度の半ばの時点で特に1年生に表出していたといえる。学年別では、2019年度と2020年度で承認感や、友達関係において同様の傾向が見られるが、2020年度の1年生は承認感、友達関係、学習意欲、学級の雰囲気は2019年度に比べて有意に低かったのである。この背景に共通するのは、やはり他者との交流が減少したという事であると考えられる。その結果、トラブルは減少したのだが、主体的に活動して他者から認められる喜びや、友達関係を形成したいという意欲、学級集団とかかわっていききたいという意欲が低い状況であったと推測される。このような状態も、一見、「小1プロブレム」の問題が落ち着いたように感じられるが、活動意欲が低下して静かになっているだけの状態であると考えられる。「小1プロブレム」は1年生の児童が学校生活に適應できないために起こす、授業中、勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外へ出て行ったりする問題行動で、その発生要因として「児童に耐性が身に付いていなかったこと」が指摘されている（東京都教育庁、2009）。このような状態に対して、外発的に我慢をさせたり、抑制させたりするだけでは教育としては十分ではなく、児童のストレス耐性を建設的に形成することにつながらないと思われる。例えば、原因帰属再教育法（Dweck, 1975）を実施して、ストレスとなる教育課題の意義・意味を理解させる、逸脱行動ではなく自分の意見を言うようにするなど、自制心を計画的に育成することが期待されるのである。それが十分にできていないと危惧されるコロナ禍の2020年度の状況は、教育的な問題を抱えている可能性があると思われる。

また、2年生における学習意欲、学級の雰囲気得点の向上については、学級満足度尺度と学校生活意欲尺度には相関があるため、被侵害得点が有意に減少したことにより、学校生活意欲との関連があったことが想定される。しかし、2年生においても、1年生と同様

にかかわりが制限された中での結果であるため同様に今後のアセスメントや、対応が求められるだろう。

以上、2020年9～11月時点で、すでに小学校低学年の児童に、新型コロナウイルスの感染予防のため、他者との直接的なかわりや協働活動の展開が物理的に制限された影響が、少なからず生起していることが推測された。その影響は低学年すべてに均等に生起するのではなく、発達段階によってその影響に差異があり、最も年少の1年生にすでに有意に高く生起していることが明らかになった。また、特定の発達段階でのネガティブな影響は、次の発達段階へのマイナスの影響につながる可能性が推測され、この時点だけの問題ではないと考えられる。新型コロナウイルスの感染予防のための取り組みは2021年度も継続されることが想定される。したがって、感染予防を徹底しながらも、他者とのかわりや協働活動が一定程度担保される工夫が求められてくると考えられる。

最後に本研究の限界を挙げる。本研究は、特定の地域の小学校低学年の児童を対象にしており、また、コロナ禍という緊急時において本研究結果を、すぐに教育実践に還元することを目指し、児童の1年間の変容について検討を行った研究である。そのため、今後は、複数の地域の低学年の児童のデータや質的なデータを含めた検討、より長い期間での縦断的な検討を行い、一般的な結果となる可能性を高めていく必要がある。今後の課題としたい。

【引用文献】

- 中央教育審議会（2016）. 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- Dweck, C.S. (1975). The Role of Expectations and Attributions in the Alleviation of Learned Helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 674-685.
- 河村茂雄（2006）. 学級づくりのためのQ-U入門
図書文化
- 河村茂雄（2010）. 教育と人間の成長・発達（pp.18-

- 30). 安彦忠彦・石堂常世(編)「最新教育原理」(分担執筆) 勁草書房
- 文部科学省 (2009). 子どもの徳育に関する懇談会「審議の概要」(案) 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題
- 文部科学省 (2017). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査
- 文部科学省 (2020). 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～
- 東京都教育庁 (2009). 東京都公立小・中学校における第1学年の児童・生徒の学校生活への適応状況にかかわる実態調査について
- (2021年8月1日受稿, 2022年1月26日受理)

*An Examination of Class Life Satisfaction and Motivation
in AY 2020 During the COVID-19 Pandemic
—Focusing on Children in the Lower Grades of Elementary School—*

Yuka Musashi (Tsuru University)

Akikazu Kawamura (Tokyo University of Social Welfare)

Shigeo Kawamura (Waseda University)

In AY 2020, school education was conducted under conditions that restricted direct interaction with others and the development of collaborative activities in order to prevent the spread of the novel coronavirus. The purpose of this study was to explore and clarify how such a situation affected children in the lower grades of elementary school. Therefore, in this study we surveyed children's class life satisfaction and their motivation (school morale) in AY 2019, before the outbreak of the novel coronavirus, and in AY 2020, when infectious disease control measures were thoroughly implemented, and examined the differences between the two academic years. The subjects of the study were children in the lower grades of elementary school in the same region and the same school. The results showed that, overall, infringement scores were lower in AY 2020 than in AY 2019, there was an increase in the percentage of those in the non-approval group, and there was a decrease in the percentage of those in the class life dissatisfaction group. It is believed that the decrease in infringing behaviors due to restricted interactions with others may have resulted in the transition of students in the second and third grade from the class life dissatisfaction group to the non-approval group. Looking at the results by grade, first graders in particular had significantly lower scores for feelings of approval, relationships with friends, and class atmosphere in AY 2020. While more extensive support would be expected for first graders due to the "first-grade problem," it was conjectured that the COVID-19 pandemic may have restricted individual support.

Keywords : novel coronavirus infection, collaborative activities, lower grades of elementary school, class adjustment, school life motivation